

## 理系のための英語講座 2

### 定冠詞 ( the ) と不定冠詞(a/an)

第一回の英語講座では、可算名詞(countable)と不可算名詞(uncountable)の違いについて説明した。理系英語で使われる代表的な可算名詞と不可算名詞については、誤解しやすいものを整理して、表にまとめる予定である。

日本人英語でよく間違いを指摘されるのは、 unnecessary the を使う一方で、 a を入れるべきところがないという指摘である。この the や a を正確に使いこなすのは、英語の上級レベルに属するが、理系英語の場合には、文章を書くうえで目安となるルールがある。それを紹介すると

- 1 普通名詞には冠詞をつけるか複数にする。
- 2 一般的な話をする時には、複数で表現する。
- 3 普通名詞でも前に出た名詞には the をつける。
- 4 普通名詞でも修飾詞などによって限定される場合は the をつける。

ここで、まずルール 3 について簡単に説明しよう。ある論文を読んでいて、それまで何の説明もないのに

The samples were placed in the electric furnace.

という文章が出てきたとしよう。すると、読者は electric furnace (電気炉) に the がついてるので「はてな」と首を傾げることになる。前にでていない普通名詞に the がつくのは

one and only

という場合である。つまり、それひとつしかないから限定されて the となるのであるが、そんな electric furnace (電気炉) など存在しない。製品として山のように販売されているからである。よって、読者は混乱することになる。この場合

The samples were placed in the electric furnace that we applied a temperature gradient in a vertical direction.

のように「鉛直方向に温度勾配をつけた」という修飾詞がつけば、これは自分たちで改造したもので、ただひとつしかない炉であるから the としてもよいことになる。

研究者によっては、温度勾配をつけた炉は、それほど特別な存在ではないと感じるひと

も居るであろう。この場合は、the ではなく a を使うことも可能である。

ただし、一度前に説明した電気炉を、再び文章で引用する場合には the electric furnace とする。これを an electric furnace とすると、すでに説明したのとは別の炉を使ったということになる。論文をまとめるときには、いっきに全体を書き上げることはなく、部分部分を何度も繰り返して推敲する機会が多いので、仕上げたあとで、前後関係をチェックすることも重要である。

それでは、次にルール 4 について説明しよう。実は、日本人が書いた英語論文の the を a に修正したときに、筆者から猛烈な抗議を寄せられたことがある。それは “ of + 名詞 ” で修飾されている普通名詞には必ず the をつけなければならないという誤解に基づいたものであった。

簡単な例で考えてみよう。

( ) president of Shibaura Institute of Technology

( ) student of Shibaura Institute of Technology

この( )の中に the あるいは a を入れてみよう。どちらが正しいであろうか。まず、最初の問題は、芝浦工業大学の学長という意味である。この場合、学長はひとりしかいないので the とするのが正しい。それでは、つぎはどうか。“ of + 名詞 ” で限定されているから、これも the で良さそうだが、実は the ではなく a が正しい。なぜなら芝浦工業大学の学生は数多くいるのでただ一人に限定することはできない。例えば、4本の脚があるテーブルでは

the leg of this table ではなく a leg of this table

となる。もちろん、小説を含めた文系の文章などでは

The student of Shibaura Institute of Technology

という表現もないことはない。この場合は、「典型的な芝浦工大生」あるいは「芝浦工大生の中の代表」という強い意味になるが、普通の論文でこのような強調をすることはない。むしろ原理原則にのっとり

普通名詞の単数形に the をつける場合には

one and only

という意味がある時と思えばよい。

日本人がよく間違える例として、論文で similar [同様な] という形容詞の前に the をつけ

るのを見かける。例えば、「同様の手法で」という句を

in the similar manner

としている。同様なものは数多くあり one and only ではないから、the はありえず、単数ならば、必ず a similar となる。よって

in a similar manner

が正しい。

一方、same (まったく同じ)という形容詞がつく場合は one and only であるからで、a same はありえず、必ず the same となる。よって、in the same manner となり、in a same manner はあり得ない。

The と a の区別をする場合には、不定冠詞 a/an には

one of many

という意味があると理解していればよい。つまり

a: one of many

the: one and only

という違いを認識していれば、論文を書くときに、それほどとまどうことはない。

ただし、言語というのは、理系の学問と異なって常に例外がある。慣用句として通っているものは、今の法則とは関係なく使わざるを得ない。

例えば country は国という意味の普通名詞であり、a country (ある国) や countries (国々) のように普通名詞として単数と複数がある。ただし、the country のように頭に the をつけると「田舎」という違った意味になる。

また、電話の telephone は a telephone というではなく、the telephone と the をつける。これに対しては、telephone は Bell が最初に発明した 1 台だけが本物で、後はそのコピーだから、one and only だという屁理屈もあるが、このような例外は、下手な理屈をつけるよりも、地道に覚えていくしかない。